

いったい珍珠海は何処にあるのよ～～！？

いつの間にか山道を登っていた。仙乃日シエンナイリーの麓から元の広場のような場所まで後戻りした私は、別の方向にのびている小道を歩いていた。先程までの道と呼べるかどうかとも怪しい灌木の隙間を縫う細い踏み跡に比べれば、こちらはしっかりと踏み固められた確かな道だった。

こんどこそ間違いないと確信を持って歩きだした筈だったが、道はどうやらどんどん山奥へと入って行くような様子なのだ。30分ほど歩いたところで「本当にこっちで良いのかなぁ・・・」と不審に思われてきた頃、突然森の奥から楽しげに叫び声をあげながら馬に跨り山道を駆け下りてくる一行がやって来て、先頭を走っていた馬の若者が私を見ると声をあげた。

「小姐、何処に行くつもりだい！？」

「チエンジュフハイ
珍珠海よ」

「珍珠海なら後ろだよ！この道は君が一日歩き続けたって何処にもたどり着けやしないさ」

彼はそう叫びながらアッという間に私とすれ違おうと道を駆け下っていった。

その後を少し遅れて楽しそうに笑い声をあげながら、西洋人の男性と東洋人の女性が、やはり馬に跨り土地の人間らしい男と共に、道を駆け下りてきた。きっと先頭の馬の青年はガイドなのだろう。この亜丁自然保護区の中をグルッと大きく周遊できる道があるのだと聞いた事があった。きっと彼らは馬でその道を回ってきたのに違いない。

羨ましが込み上げてきた。この美しい土地で私がまだ見た事のない場所にはどんな景色が広がっているのだろうか。ここに滞在している間にぜひ自分も行ってみたいが、亜丁を訪れる前に十分な中国元を準備してこなかった私には、馬やガイドを雇うだけのお金の余裕は無かったのだ。いったいどうすれば行く事ができるのだろうか…。珍珠海よりもそちらの事で頭をいっぱいにしなから、私は今まで登ってきた道を回れ右して彼らの去っていった後の道を下った。

再び元の広場まで戻って来たところで、珍珠海への入り口はスグにわかった。中国人の団体旅行と思われる一行がガイドに連れられ林の中に入っていくのが見えたのだ。彼らの後を追いかけて最初から知っていなければ絶対気がつかないような林の中の道を少し進むとスグに木々の隙間から珍珠海の湖面が見えてきた。

これまで亜丁の湖といえば、宝石のように美しい「ニウナイ牛奶海」や「ワースハイ五色海」を見てきていた私は「珍珠海」にはとっっても期待していた。昨夜の宿で強欲そうな宿の親父と話していた時も「亜丁の湖の中で一番美しいのはどれだと思

う？」という私の問いに、宿の親父は親指を立てながら「珍珠海」だと答えていたのだ。だが林の中を抜け湖の湖畔におりた私はすっかりガッカリしてしまった。

周囲をグルッと森に囲まれた湖は、珍珠海というその名に似合わず水はドロンとにごった緑色で、湖畔にはマナーの悪い観光客が落としていったらしいゴミまで落ちていた。これでは日本でも見られる普通の沼や湖と変わりない。だが湖畔でやかましく騒ぎながら熱心に記念写真を撮り合っている旅行者達から離れ、一人で湖の奥へ向かった時「ああ、そうなのか・・・」と合点がいった気がした。

湖を奥の方から眺めた真正面には先程私がその麓にただずんでいた仙乃日が、雲に覆われた姿で湖の向こう側に聳えていた。珍珠海の美しさとは仙乃日とセットになっているものなのだ。そういえば昨夜話している時にも、宿の親父が仙乃日が湖に逆さに映りこんでいる観光写真を私に見せてくれていたっけ。

この湖から間近に聳えている仙乃日は、白銀に輝く亜丁三大神山の中でも最高峰だ。雲が晴れていればどれほど素晴らしい眺めになるのだろう。だがその姿が厚い雲の中に隠れてしまっていれば珍珠海はただの緑色の沼だ。これまで亜丁で見えてきた宝石のように美しい青く輝く湖の姿から、珍珠海にも湖そのものの美しさに期待を膨らませていた私は、少し白けた気持ちで湖を後にした。沖古寺に戻る帰り道の途中で、またパラパラと雨が落ちてきていた。

小屋に戻って暖かい汁麺を食べていると、私を見つけた先程の少女が待ち構えていたように寄ってきて私の横にちょこんと腰掛けた。その場にいたおじさんが「彼女はまた紙を折って欲しいんだよ」と笑いながら言った。折り紙のおかげですっかり仲良しになれたらしい。少女が期待のこもった目で私を見つめているので、急いで麺を食べ終え折り紙を取り出すと仕事を終えて小屋で一休みしていたらしい村のおじさんや少年達も集まってきた。

私が鶴や花などを次々に折って見せ皆が感心する度に、宿屋のお嬢はすっかり「私のお姉ちゃんよ」といった態度で得意そうに折り紙を取り上げ、全部自分の物にしているのが子供らしい欲張りさで可愛らしい。ふと見ると賑わっている輪の後ろで、この小屋の従業員の娘であるらしい少し年上の大人しそうな少女がひっそりとこちらを見つめていた。彼女を呼び寄せ「あなたもやりたい？」と尋ねるとコクンと頷いたので、彼女にも折り紙を渡して折り方を教えながら二人で鶴を折って見せると、周りにいた腕白そうな少年達やおじさん達までが自分もやりたいと身をのりだして紙を取り上げ、食堂はすっかり折り紙の講習会場だ。

ちょっと教えただけでスグに折り方を覚えて上手に作ってみせる子もいれば、紙をきちんと二つ折りにする事さ

え上手くできずに折り紙をぐちゃぐちゃにしまう子もいるが、みんな好奇心に目をキラキラさせて楽しそう。私はみんなが打ち解けてくれた事が嬉しくてたまらなかった。旅に出て一番楽しいのはこんな現地の人々との触れ合いだ。やっと亜丁がわたしに心を開いてくれた。そんな気がして胸の中が喜びに満たされていた。

外はザアザアと激しく雨が降っていた。先程の帰り道で濡れた身体が冷えて寒くなってきた。

「ねえ、火のそばに座りましょうよ」

席を立てて台所に入ると昨夜のうちにすっかり馴染んでしまった厨房の青年に声をかけ、台所の裏口の外側にあるカマドの後ろのベンチに座った。トタンの屋根からは激しく雨水が流れ落ちていたが、そこはまるで暖炉の前に座っているように暖かくて居心地が良い場所だ。少女達や村人と火の焚き口の前に並んで座り、折り紙を折ったり喋ったりしながら火が弱くなれば自由にベンチの後ろに山にして積んである薪を取ってカマドの中にくべた。

後ろを振り返れば雨に煙るように亜丁の湿原が広がっている。こんな風に村人達と過ごしていると、まるで自分もこの村の一員になったような気持ちだった。折り紙に飽きると歌を歌った。私の数少ない中国語の歌のレパートリーの中で、一番みんなに受けたのは「小薇」だ。中国系人間なら世界中で誰もが知っている、明るいメロディーの可愛らしいラブソングはチベット族である彼らにも知られているらしい。

私が歌うと少女達も一緒にハモって合唱になった。

「・・・ある一人の可憐な少女、彼女の名前は小薇さ
彼女は優しい眼差しで、僕の心を盗んで行った・・・」

村のおじさん達がカマドの燃え差して火を付けたタバコをふかしながら「很好、很好」と褒めてくれた。

新宿の裏町で中国人の同僚と働いていた時に覚えたこの歌を、こんな場所でこんな風に歌う事になるなんて。

そういえばマレーシアを旅行中、ある街で毎日通っていた華僑の営む食堂の女の子達とも一緒にこの歌を歌った事があったのを思い出した。全く中国人達の世界はワールドワイドだ。中国語が話せれば世界中どこでも生きていけるという話を聞いた事があるけど、きっと本当にそうなのだろう。

他に歌える歌が無いので同じ歌を何度も繰り返し歌っていると、小屋の裏が賑やかなので様子を見に来たらしい強欲顔の宿の女将は、自分の娘が私の隣にちょこんと座りすっかりなついている様子を見て苦笑いしていた。

いつの間にか厨房から出てきていた昨夜の青年が私に言った。

「小姐、君は変わってるよな。俺は今まで此処で働いて何人もの日本人が泊まっていくのを見たよ。だけど俺達

の仲間に入ってきて、一緒に喋ったりしたのは君一人だけだ。他の日本人は俺達なんかに興味を持たないさ。何で君は俺達と喋るんだ？」

そんな事を聞かれても戸惑ってしまう。私はただ自分の訪れた土地の人達と触れ合うのが好きただけだ。極端な事をいえば旅は観光などしなくても、その土地の人と交流が持てたらそれだけでいいくらいだ。

「だって亜丁が好きなんだもの。あなた達も亜丁の一部でしょう？」

青年にはそう答えた。

私達がそんな風にカマドのそばで過ごしていると、雨でびしょ濡れになった数人の中国人旅行者達が火にあたりに来てきた。亜丁の入り口から此処に来るまでに、雨に降られて濡れてしまったのだ。

彼らのために場所を空けながら挨拶を交わして暫く話をした。広東省から6人で旅行にやってきたのだそうだ。昨日一緒に山を登った学生達も広東省からだったが、今日の彼らは既に社会人の香りがする少し大人のグループだ。

中国については詳しく知らないがアジアの十字路であり中国の経済特区でもある香港に隣接する広東省は、中国の中でも指折りの大都会の筈だ。広東省から訪れる旅行者が多いというのも、その都市の豊かさの表れなのだろうか。明日は洛絨牛場に遊びに行く予定だという彼らに、私は熱っぽい口調で山の上に輝く湖の話をした。

暫く火にあたって温まっていた彼らが部屋に戻ってしまった後も、私はまだその場に留まって村人達と過ごしていた。宵闇に包まれた小屋の外でパチパチとはぜる赤い炎を見つめているのは心地良いものだ。明日の予定は何も決まっていない。夜の闇が濃くなり一人、また一人と村人達が去って行くまで私はそこに座っていた。

部屋に戻ったのは9時過ぎだった。意外な事に同室の泊まり客は先程火のそばで話をした広東省のグループだったが、それより驚いたのは部屋の中に貧しい身なりをした6人もの村の男達がいて彼らと何か相談している真最中だったのだ。

「いったい何事なの？」驚いている私に彼らの言う事には、村の男達はどうやらホーストレッキングの勧誘とガイド料の相談に来ていたらしいのだ。私の目が輝いた。